

東南アジア史 誤解と正解

桃木至朗（大阪大学大学院文学研究科）

momoki@let.osaka-u.ac.jp

I 自己紹介

- ・1955年、横浜市神奈川区生まれ。横浜翠嵐高校、京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科中退（東洋史学専攻）。1986-88年ベトナム・ハノイ大学ベトナム語科実習生
- ・京都大学東南アジア研究センター助手、大阪外国語大学タイ・ベトナム語科専任講師（ベトナム語・文化）、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授などをへて、2001年から大阪大学大学院文学研究科教授（東洋史学）
- ・専門とする学問：ベトナム中世・近世史を中心とする東南アジア史、アジア海域史 [日本の大学教員のうちベトナム史、東南アジア史の専門家はそれぞれ約15人と約70人、その過半は近現代史が専門]
- ・主要学術著作：著書『チャンパ 歴史・末裔・建築』（樋口英夫・重枝豊と共著、めこん、1999年、『**海域アジア史研究入門**』（共編著、岩波書店、2007年刊行予定）、論文「一家の事業としての李朝——ベトナム王朝国家形成史への一視角」（『東洋学報』79-4、1998年、pp.01-025.）、「南の海域世界——中国における南海交易と南海情報」（『岩波講座世界歴史9 中華の分裂と再生』岩波書店、1999年、pp.109-130.）、「唐宋変革とベトナム」（『岩波講座東南アジア史2 東南アジア古代国家の成立と展開』岩波書店、2001年、pp.29-54）、「『ベトナム史』の確立」（同上書、pp.171-196）など
- ・高校教育に関連する著作：①『新編高等世界史B』『最新世界史図説タペストリー』（いずれも共著、帝国書院）など教科書・資料集、②教科書の指導書、『世界史のしおり』（帝国書院の季刊誌）、『世界史小辞典』の東南アジア関連項目（山川出版社）、『ベトナムの事典』（共編著、同朋舎、1999年）などの事典・解説、③「**東南アジア史整理のポイント**」（『歴史と地理』2003年2月号）、「**詳説世界史（山川出版社）の東南アジア史記述とそれに対するコメント・解説——「見えない東南アジア史」からの脱却をめざして**」（科学研究費「不可視の時代の東南アジア史」（代表早瀬晋三）報告書、2006年3月刊行予定）など東南アジア史のまとめ方に関する論文、④『世界史リブレット12 歴史世界としての東南アジア』（山川出版社、1996年）、『岩波講座東南アジア史別巻 東南アジア史研究案内』（早瀬晋三と共編、2003年などの概説書、研究入門）など。

II 高校で東南アジア史を教える意義・方法・課題

1 東南アジア史を教える意義と方法

Iであげた各著作のほか、2003年度講義「東南アジア史の枠組を教える方法」、2004年度講義「東南アジアにおける外来文明や「世界」との向き合い方」などで紹介したので、ここでは繰り返さない。「こんなに新しいことを言われても、授業で教える時間はない」という議論も取り上げない。

2 興味をもて、わかる東南アジア史

(1) 3つのいとぐち [地図を書かせることが前提]：①歴史そのものの体系（枠組）の提示、②日本とのつながり・共通点の紹介、③エスニック料理や民族衣装、踊りと音楽など、暮らしや文化に親しませる（できれば「バナナと日本人」や「枯葉剤」など「硬派」の話題も。ただそればかりだと「かわいそうな東南アジア」イメージを増幅するので要注意→いずれにしても地理や現代社会との連携が必要)

(2) 教えるなら、最小限なにを教えるか [AB共通]

- ①風土と住民：熱帯で雨が多く、産物や資源が豊富（米、香辛料、石油...）／多民族社会で中国やインドなど外部との交流も古くから盛ん
- ②15世紀以前：活発な貿易と海上交流（マラッカ王国）／外来文明の影響を受ける側だが、しかし選択的受容や改造によって独自の文化を形成（ポロブドゥールとアンコール=ワット）
- ③16~18世紀：イスラーム圏（群島部）や上座仏教圏（大陸部）など、現在の宗教分布の確立／大航海時代以後

の貿易の繁栄と、ヨーロッパ人、中国人（華僑）などの進出

④19世紀～20世紀前半：欧米諸国による植民地支配（タイを除く）と、太平洋戦争下での日本の占領

⑤20世紀後半：独立の苦闘（ホーチミンとベトナム戦争）／〈社会主義の悲劇（ベトナム難民とカンボジア大虐殺）〉／ASEANの経済成長・地域統合（リー・クアンユウ）

*現在の地名・国名や地理用語をのぞけば、語句は16個程度で足りる（うち斜字体は省略可）

★これ以上教える場合には——実際に教える範囲は条件次第として——拙著③のレベルの理解をもとに教えることが望ましい

3 東南アジア史に関連する専攻がある／東南アジア史の専門家がいる主な大学

・北大、東大、東京外大、千葉大、上智大、早大、慶大、立大、東京女子大、大東文化大、神田外語大、名大、南山大、愛知大、京大、阪大、神戸大、大阪外大、大阪市大、桃山学院大、岡山大、広大、愛媛大、北九州大、鹿児島大…（下線は「東洋史学」など歴史系の専攻に東南アジア史専門の教員がいるところ）

*専門家のいない大学で出題している東南アジア史の入試問題はアブナイ

III 東南アジア史を研究する3つの視角、そして4つ目？

1 19世紀に確立した東洋学（日本では東洋史）

欧米諸国や日本、中国、インドなどの研究者が、「東西交渉史」やインド文明・中国文明の周辺への影響など地域をこえた交流の研究と、国・地域ごとの研究の両方をおこなう。[インドのマジュムダールの『極東のインド植民地』、フランスのセデスによる『極東のインド化された国々』（1944年、48年、64年）] →日本では戦後にセデスが紹介され、世界史教育の文化圏区分の中で、ベトナムを除く東南アジアを南アジアに付随して扱う方式が確立（「インドにおけるイスラームの侵入と東南アジアに対するモンゴルの侵攻が、東南アジアにおける「インド化された国々の時代を終わらせた」という「13世紀の危機」説も強く影響）

*文字で書かれた史料のとぼしい東南アジアでは、美術史・建築史などとくらべて一般の歴史学（文献史学）の発展はおくれ、発想は「謎解き史学」でなければ文化史・文明史にかたよる。

*第二次世界大戦までは、大国中心で弱肉強食の歴史や、東洋には古代文明はあってもその後の発展はなかったという「アジア社会停滞論」をみんなが頭から信じていた。その結果、東南アジアは「インド化」「中国化」によってはじめて文明を知った後進地域と見なされる。また、近現代は東南アジアを植民地にした欧米諸国の「帝国史」として研究されるのでなければ、政治・経済・社会などに関する「植民地学」の対象とされるだけで、東南アジアの独自性はほとんど無視される。

★植民地ごとに宗主国の研究者によって別々に研究され、しかも宗教・民俗・国家のどれも多様な東南アジアをひとまとめにする発想は、言語学、考古学、民族学などでは自然に生まれていたものの歴史学には欠けていた。第二次世界大戦とその後、日本軍や共産中国を押しえ込もうという英米の世界戦略がこの地域を重視してはじめて、この地域をひとまとめにする考え方と、それを呼ぶ東南アジアという名前が広まった。

2 第二次世界大戦後のナショナリズム史学

東南アジア各国で大学や研究機関が設立される。先進国の学者も「アジア社会停滞論」や「植民地史観」を批判するナショナリストたちの影響を受け、ヨーロッパ中心の帝国史でも植民地学でもなく、東南アジア諸国の側から見た近現代史研究が成立する→日本の世界史教育の東南アジア近現代史もこれが基本

*国や民族を単位とするナショナリズムは、先進国側の蔑視をひっくりかえしたが、典型的な多民族雑居社会である東南アジアの研究には限界。たとえば「黄金の三角地帯」のような現在の国境をまたぐ地域の研究はうまくできず、チャンパーのような現在の国家につながらない国家の歴史は忘れられるかタブーになる。考古学（自分たちの歴史の古さをアピールする）と近現代史（ナショナリズムそのものの歴史）の研究は進んだが、「世界最古の農業」「世界最古の金属器」などタイの遺跡めぐり無理な主張がおこなわれたように歪んだものだったし、「インド化」「中国化」という見方に反発するあまりインド史・中国史研究と断絶し、サンスクリットや漢文の素養を失った古代・中世史はレベル低下。

*ナショナリズムと結びつきながら第二次大戦後の世界で流行したマルクス主義は、生産（農業）と所有を絶対視する発想が、消費と流通（貿易）の大事な東南アジアに合わないなど、問題点が多く、東南アジアでは社会主義政権ができたベトナムをのぞいて、あまりはやらない。

3 1970年代以降に定着したアメリカ式「地域研究」

戦後すぐ始まったアメリカの地域研究は、露骨な世界戦略の道具だったが、ベトナム反戦運動や「ポスト・モダニズム」思想などいろいろな影響で、70年代以後には深みを持ち、現代の政治・経済問題だけでなく文化や歴史

に関心をもつようになる。その結果、「多様性のなかの統一」という「東南アジアの独自性（東南アジアが共有する特質）」の解明に大きく貢献し、東南アジアをひとつの地域として理解することに積極的意味をあたえる。

* 社会科学など諸部門を総合した「学際的研究」とフィールドワーク中心主義、現地側の視点を尊重し先進国の常識を押しつけない「文化相対主義」などが成果を生む。日本の東南アジア地域研究は、農学・生態学や考古学、漢文史料を使った歴史研究などで世界に貢献。

★ 西洋史、日本史など他の地域の歴史研究にさきがけて、**東南アジア史の学界は文化人類学や農学・生態学など他の学界との相互乗り入れをすすめ、あらたな理論やユニークな研究成果をつぎつぎ出してきた** [①アンソニー・リードや石井米雄らの**海域世界論**や**港市国家論**、高谷好一らの**農業生態研究**など**経済史関連の研究**、②ギアツ「**劇場国家**」やウオルターズ「**マンダラ**」など**国家論・権力論**、③アンダーソン「**想像の共同体**」など**民族・国民意識の研究**...]。これが、*Cambridge History of Southeast Asia*(1992)や『岩波講座東南アジア史』(2001～2003)の刊行に象徴される、**歴史学界での東南アジア史の市民権獲得**をもたらした。

* 地域研究の発展の結果、「大学で東南アジア史の授業を受けたこともない」インド史や中国史の専門家には、正確な教科書記述や入試問題作成は不可能になっている。しかし東南アジア史の専門家を執筆に加えている教科書はまだ少数派（だから、説明が古いだけでなく、表記や年号、語句選定などのレベルからして間違いが多い）→そういう教科書を数えた「用語集頻度」になんの意味があるのか？

4 21世紀の東南アジア史学の危機と挑戦

今日では他地域の歴史研究でも学際的研究が当たり前になったため、「地域研究」による独自性の主張だけでは、もはや学界をリードできない（→学界をリードできない少数分野は、「大学改革」のなかで「多数決による切り捨て」の対象になるであろう）。**独自性を前提としつつ、東南アジア史を世界史にどう位置づけるか（東南アジア史理解が世界史理解にどう貢献しうるか）が課題とされている。**[東・東南・南アジアを結ぶ杉原薫の**アジア間貿易論**、**東南アジア大陸部・フランスを中心とする西欧・日本列島**などの中・近世に共通する**国家・民族統合のトレンド**を論じたリーバーマンの**比較史**...]

* グローバル化の進展がこの動きを後押ししている。とくに華僑ネットワークの活況と中国のプレゼンスの増大や、東南アジアを一方の中心とする「東アジア共同体構想」の浮上などにより、日中韓など東アジア（東北アジア）との歴史的つながりの研究が脚光を浴びている。

IV 東南アジア史 誤解と正解

1. 鬼畜米英なんてもう知らないだろうな？

例1：06年度京都産大（全学部）

下線部h（20世紀前半の日本の太平洋進出）に関連して、もっとも不適切な説明はどれか。

2. 第一次大戦開始直後、日本軍はミクロネシアの旧フランス領を占領した。

3. 太平洋戦争は1941年の日本の真珠湾攻撃で始まった。（選択肢1, 3～6は略）[正解は2のつもり]

・「同年12月8日、日本軍はハワイの真珠湾にある米海軍基地を奇襲し、マレー半島に軍を上陸させて、アメリカ・イギリスに宣戦し、太平洋戦争に突入した。」（詳説世界史 pp.314-315）

・「12月8日、日本はマレー半島に上陸し、ハワイの真珠湾を奇襲攻撃するとともに、アメリカ・イギリスに宣戦布告し...」（改訂版詳説日本史、P.330）

解説：日本軍は、真珠湾攻撃の1時間5分前の12月8日午前2時15分（現地時間）にマレー半島北東コタバル（英領）に上陸した。戦後の日米関係から、戦争そのものを「アメリカと戦ってアメリカに負けた戦争」と誤解してはいけない。

2. 「ギョエテとは俺のことかと...」

例2：「ベトナム共和国（南ベトナム）では1955年、アメリカ合衆国の支援を受けたゴ＝ディン＝デイエム政権が成立した。」（詳説世界史 p.335）

・06年度入試でも近大（全、1月28日実施分）、南山大（経営）ほかで出題。

・当時の新聞はゴ・ジンジエム、古田元夫『歴史としてのベトナム戦争』（大月書店）ではゴ・ディン・ジエム。『青木世界史B』では「ゴ＝ディン＝ジエム」。

解説：教科書が英語でなく現地語主義を取るなら、ゴ＝ディン＝ディエム (Ngô Đình Diệm) は明瞭な間違い。「大名古屋ビルジング」式の表記をするなら、ゴ＝ジン＝ジエムは間違いではない。ベトナム語の d には二種類あり、Đinh は横棒がつく [d] 音だが Diệm は横棒がつかない [dz] 音である。なお Ngô は日本語の「ゴ」と「ゴー」の中間の長さなのだが、私見では平らな声調で後ろに子音が付かない場合、長音で表記する方がよい。二重母音の iê は「イエ」でも「イェ」でも可。従ってこの人物は**ゴ＝ディン＝ジエム** (または**ジエム**、**ズイエム**) である。●また、ベトナムでは姓の種類が少ないため、人を姓だけで呼ぶことはほとんどない (ホー＝チ＝ミンを「ホーおじさん」と呼ぶのは特別)。一般には漢字3文字の名前の最後の字で呼ぶ。したがって「ゴ政権」は間違いで「ジエム政権」が正しい。

*このほかユエ (フランス読み。現地読みはフエ) も気になる。「ヴェトナム」は、b を v に変えただけでは全然通じない (書くなら「ヴィエトナム」か「ヴィエツナム」) ので無意味。簡明かつ普及している「ベトナム」でよい (「ヴィエトナム」で通じた外務省も「ベトナム」に変えた)。なお意識的にベトナム語のカタカナ表記を整理した書物は『ベトナムの事典』(同朋舎) が唯一。

例3：「... 1911 年に民族的な組織である (なんのこっちゃ) イスラーム同盟 (サレカット＝イスラーム) が結成された。」(詳説世界史 p.279)

解説：「サレカット＝イスラーム」は「**生かじりの現地語主義**」の失敗例の一つ。なぜならインドネシア語ではイスラームという長母音でなく「イスラム」と発音するので、「サレカット＝イスラーム」はインドネシア語ではない。日本語訳 (だからインドネシア語の発音は無視してよい) の「イスラーム同盟」ならよいが、高校生を苦しめるだけの「サレカット＝イスラーム」などは書かないのがよい (帝国書院では注に待避させた)。現地語主義を強めるなら、マラッカ→ムラカ、モルッカ諸島→マルク諸島などとする方が大事。

3. 英語は単数と複数を区別する

例4：「イギリスは、1870 年代にはいると、それまでの港市だけの支配から領域的な支配にのりだすようになった。錫の利権をめぐる中国人やマレー人スルタンの争いに介入して支配地域をひろげ、1895 年にはマレー連合州を成立させてマレー半島の支配を確立した。」(詳説世界史 p.250)

- ・詳説世界史同ページの地図では、現在の半島マレーシア全域を「マレー連合州」と表示しているように見える。
- ・『青木世界史』(④-247) は「1895 年に、マレー半島の現地の国王が支配していた 4 つの領域がイギリスの保護領になり、ここは英領マレーと呼ばれるようになりました。マレー連合州ともいいます。」
- ・ぴったりの専門家がいる 06 年度立大 (文) の 17～20 世紀マレー半島史の問題では、定番の海峡植民地のあと、政体名は第二次大戦後のマラヤ連邦までとぶ。

解説：もともと港市国家などの小王国 (マラッカ王国の後身ジョホール王国などを含む) が分立していたマレー半島を、イギリスは順次支配下に入れた (直轄領は海峡植民地だけ)。このうちペラク、セランゴール、パハン、ヌグリスンビランの 4 国を 1895 年に Federated Malay States とした。これは複数形だから、単数形と誤解されやすい「マレー連合州」はほとんど誤訳で、「**連合マレー諸州** (または**諸邦**)」とでも訳すべきであった。このほかプルリス、ケダー、クランタン、トレンガヌ、ジョホールの 5 国は「非連合諸州 (諸邦)」と呼ばれ、個々にイギリスとの保護条約を結んでいた。海峡植民地とこれらの諸州全体が「英領マレー (マラヤ)」を構成していた。したがって詳説の地図と青木世界史の説明は、どちらも不正確。このほかに、**ボルネオ島 (カリマンタン島はインドネシアの呼称なので、現在のマレーシアの主権を認めるなら、この島全体の呼び名は英語のボルネオがよい) のサラワク、ブルネイ、サバ (北ボルネオ) の 3 地域も別に英保護領 (英領ボルネオ) となり、後にサラワク、サバの両地域はマレーシア連邦に加わった。今日のマレーシア各州のうち、元の連合マレー諸州、非連合諸州の大半には今でもスルタンがおり、その互選によって連邦全体の象徴国王 (任期 5 年!) を選ぶ。**

*これらの過程は山川『世界現代史 6 東南アジア現代史 II』に詳しい。

4. これが東アジアなら外交問題

例5：06 年度南山大 (経済)

ベトナムに関する以下の記述の下線部のうち、誤っているものを選びなさい。すべて正しい場合は (オ) を選びなさい。

ベトナムにおいては、黎朝が 15 世紀に(ア)インドにならった国家体制を確立し、チャンパーに侵攻した。16 世紀以降に黎朝が衰退すると、(イ)鄭氏と阮氏の対立により国土は分裂状態に陥った。黎朝は 18 世紀末に (ウ)西山党の乱によって滅亡した。その後、阮氏の一族の阮福映が、フランス人宣教師(エ)ピニョーの助力をえて西山朝を倒し、1802 年に阮朝をたてた。[正解はア→中国にならった]

- ・「また家康は、シャム、カンボジア、安南 (ヴェトナム) などに書簡を送り、友好関係を深めた... 日本人のなかには東南アジアに移住する者がおり、安南のフェフォ・ツーラン、ルソンのマニラ、シャムのアユタヤ、カンボジアのプノンペン・ピニャルーなど、各地に日本町ができた。移住した日本人のなかには...」(実

教出版日本史 B006、p.179)

- ・16世紀以降、黎朝の名目的な支配のもとで政治勢力が南北に分裂していたベトナムでは、西山党の反乱によって黎朝がほろぼされ、ついでフランスの支援を受けた阮福暎が西山朝を倒して1802年にベトナムを統一した(阮朝)。(詳説世界史 pp.162-163)
- ・「ヴェトナムでは、17世紀以降、北部の鄭氏と中部の阮氏が勢力を二分していた。18世紀後半にタイソン(西山)党の反乱がおこって、両氏はともに滅亡した。阮氏一族である阮福暎(嘉隆帝)は、タイやフランス人の援助のもと、1802年、タイソン党をやぶって全ヴェトナムを統一し、阮朝をおこして、国号を越南(ヴェトナム)と定めた。」(東京書籍世界史B002、p.291)

解説: ①16世紀に黎朝を中絶させた莫朝(1527-92)は、復活した黎朝に倒されたため正統政権として扱われてこなかったが、実際には黎朝復活(1532年)以後も長期間、国土の大半を支配し明の承認も受けていた。その間は黎朝側がむしろ、地方の反乱政権にすぎなかった。②莫朝打倒後の黎朝は、実権を鄭氏、阮氏の二大軍事集団に奪われていた。首都昇竜(東都、東京とも呼ぶ。現在のハノイ)で黎氏を押さえたのが鄭氏、対抗して旧チャンパー領の中部ベトナムに事実上独自の政権を作ったのが**阮氏**である(当初は本拠が北緯17度線近辺を転々とし、17世紀末にフエに落ち着く。**最初からフエで政権を立てたような****解説・入試**(06年度明大(商))、関大(法)など)は誤り。海外では黎朝=鄭氏政権を東京(トンキン)、阮氏政権を広南、コーチシナなどと呼んで、別々の国家と見なした(史料に安南と出てくる場合は、トンキンを指す場合とコーチシナを指す場合がある)。両者とも日本貿易に力を入れ、17世紀中期には鄭氏がオランダ東インド会社、阮氏が鄭成功一族やマカオのポルトガル人と結んで激しい内戦を繰り広げたが、1672年に和平が結ばれ、南北分裂が固定化、その後の阮氏はチャンパーを押しつぶし、カンボジア領で華人勢力も強かったメコンデルタまで進出する[当初「下コーチシナ」と呼ばれた今のベトナム南部が、仏領時代には単にコーチシナと呼ばれ、もともと阮氏領だった中部ベトナムはベトナム王朝の中国名安南にちなんでアンナンと呼ばれる]。③**「西山党の乱」は「東学党の乱」と同じ古い呼び方で、ベトナム政府に抗議されかねない。**ベトナムでは「タイソン起義」「タイソン運動」などと呼ぶ(一時「タイソン革命」の語が日本に紹介されたが、現在では使わない)。現在の日本の学界では「西山(タイソン)反乱」が普通であろう。この反乱は中部(現在のクイニョンの近く)の西山という場所で、1771年(73年とする入試問題があるが不適切)に阮氏3兄弟が起こしたもののだが、この阮氏三兄弟はフエの阮氏とは無関係なので混同してはいけない(ベトナム人の姓では阮<グエン>氏が朝鮮半島の金氏同様の最大多数を占める)。西山反乱(とくに末弟の阮文恵が活躍し即位するので西山朝と呼ぶ)で混乱したフエの阮氏は、チャンスと見て南下した鄭氏に滅ぼされ、その鄭氏も北上した阮文恵に倒される**【鄭氏・阮氏の両方とも西山反乱に滅ぼされたかのような入試問題があるが(06年度明大(商)など)、東書の記述はそういう意味ではない】**。黎朝は清に救援をもとめたが、乾隆帝が送った軍は1789年に阮文恵に惨敗し[「十全老人」乾隆帝の軍は、ベトナムで大敗しビルマでは泥沼状態で撤兵する]、黎氏は清に亡命して黎朝は終わる。しかし乾隆帝はやむなく阮文恵を安南国王に冊封する。④だがそのころ、フエの阮氏の生き残り西山軍に追われてタイ湾を転々とし、最後はバンコクに亡命してラーマ1世の庇護を受けていた阮福暎(嘉隆帝)が、サイゴンに戻って徐々に勢力を広げ、1802年までに西山朝を倒して南北を統一した[フエに都を置き、国名を越南<ベトナム>と改めた。清も嘉隆帝を越南国王に封じたので、ここで国名の自称と他称が一致した。ベトナムという現在の国名と南北統一された現在の領土は、阮朝に始まる]。**阮福暎の勝利の背景として、フランスの支援が有名だが[仏人宣教師ピニョーの仲介でルイ16世と同盟条約を結んだが、これによる仏の支援がおこなわれぬうちにフランス革命がおこって条約が消滅したので、ピニョーは自ら義勇軍を集めてベトナムに戻り阮福暎を助けた。このときの支援がのちに仏のベトナム侵略の根拠の一つとなる]、しかしその規模は小さかった。このことばかり教科書に書き入試に出す日本という国を、ベトナム人は快く思わないだろう、**西山朝との戦争の勝敗を決定したのは、西山側が外交戦に失敗して清や周辺諸国から見放され、逆にタイ、ラオス、カンボジアや南シナ海・タイ湾の華人勢力の大半が阮福暎を助けたことだったと考えられる。

◆**朱印船貿易と日本町に関する教科書記述(特に日本史の)**は、いまだに戦前戦後の第一人者岩生成一の成果により、実際の東南アジアを知らないままで、しかも当時の用語法によって書かれている。たとえば日本町の「フェフォ」(Faifo, Faifoo)はフランス読みだが日本町の時代にフランス人は関係ないので、「フェイフォー」か「ファイフォー」がよい(現在のホイアン。1990年代の発掘調査で有田焼などいろいろな遺物が出土している)。「ツーラン」はトゥーラン(現在のダナン)だが、ここに日本町があったという岩生の説は怪しい(帝国書院も地図に載せてるが)。また「シャム」「ルソン」などの国名が平気で使われているが(→06年度明治学院大文・経・法日本史、センター2004年度本試験など)、(タイ)(フィリピン)と補わないと生徒は理解できないだろう。●日本史教科書(一部は中学の歴史教科書)に載る地図は、琉球王国の貿易相手・ルートを示す地図と同様に間違いだらけで訂正しきれないが、**北部ベトナムの港としてハイフォンを表示するのだけはやめてほしい**(複数の教科書に見られるが、岩生はこんなことは書いてない)。ハイフォンは19世紀に開かれた港で、17世紀北部ベトナム(トンキン)の主要港は、ホン川下流のフォーヒエンと、17度線の北のゲアン。日本からは、海南島の南を通してゲアンに着き、そこから沿岸伝いにホン川デルタに上がっていくのが普通だった。朱印船・日本船の航路を示した図は、この点でほとんどが間違っている。ついでに朱印船の渡航地として福建省沿岸に「信州」と書いてある地図があるが、これは当時の日本人が耳で聞いて当て字をしたもので、正しくは漳州(明末に海禁を緩和した際に最初に開いた港。清代にはこの近くに、今も台湾との貿易などで栄える港アモイができる)。またベトナムのフエのあたりを日本史料ではソンハと書くがこれは同地方を指す「順化」のこと(フエそのものの建設は1680年代)。同様にフェイフォーの一角を指す「迦知安」は、口語(漢語でないベトナム語)

の地方名「ケーチエム」(チャム人の地)の当て字。

*以上を詳しく書いた1冊本の概説書は存在しないのが難点。『もっと知りたいベトナム』(弘文堂)、『岩波講座東南アジア史』などが比較的使える。

◆ほかに教科書記述では、上記の「カリマンタン島」や、「マジャパヒトの最大版図」に見る親インドネシア・反マレーシア(シンガポール)主義——スカルノ時代のインドネシアへの親近感(裏返して「親西側・反共」のマレーシア・シンガポールへの蔑視)がもと——など、これが隣近所なら外交問題になりそうな無神経な点が少なくない。

5. 地図をよく確かめよう

例6:06年度明学大(経・社)

(穴埋め)東南アジア最大のW川河口のC市の市名は、フランスからの独立戦争、嗣いでアメリカ合衆国との戦いを指導した人物に因んで命名された。[正解はメコン川河口のホーチミン市のつもり]

- ・青木世界史④-240に「Q:サイゴン条約によってフランスが獲得したメコン川流域の領土はどこか?」と問いがある。[厳密には06年度明大(商)1ーカに見るようにコーチシナ東部3省を獲得した1862年の第一サイゴン条約、西部3省(メコンデルタ)を獲得した1867年の第二サイゴン条約があるので、この問いは紛らわしい。フエ条約も1883年の第一と84年の第二がある]
- ・「ナポレオン3世治下のフランスは、インドシナへの侵略を開始し、1862年にサイゴンを中心とする南部を奪って、メコンデルタに米作プランテーションを開いた。」(東京書籍世界史B002、p.291)

解説:これは「ベトナム南部(コーチシナ)=メコンデルタ」という早のみこみが、ベトナム戦争報道などを通じて広がった点に問題があると思われる。サイゴン(ホーチミン市)はドンナイ・サイゴン川水系という、メコン川とは別の水系に属する。また現在のベトナムでは、南部(仏領時代のコーチシナ)を「東(ひがし)南部」と「メコンデルタ」の2地域に分け、ホーチミン市は前者に含まれる。

例7:06年度明大(商)

(穴埋め)ヨーロッパ列強の進出以前、インドネシアにはジャワ中部を中心としてヒンドゥー教のA王国が栄えていた... [正解はマジャパヒトのつもり]

- ・「稲作がさかんなジャワ島中部の盆地では、8世紀中ごろからジャワ人が古マタラム国を建設し... ジャワ島中部にプランバナン寺院群を建設している。」(東京書籍世界史B002、p.108)
- ・マラッカ海峡と香辛料の産地モルッカ諸島を結ぶジャワ島東部では、11世紀以来、クディリ王国、ついでシンガサリ王国が、三仏教と覇権を争った... シンガサリ王国は13世紀末に元軍の侵攻を受けたが、ジャワ軍は元軍を撃退し、新しい指揮者がマジャパヒト王国を建てた。(同、pp.190-191)

解説:ジャワ島は地理的に西部・中部・東部に分かれる。民族分布でいうと中部・東部はジャワ人(インドネシア最大の民族)が住むのに対し、ジャカルタのある西部はスダン人が住む。シャイレンドラ、古マタラムなど最初の強国が栄えたのは中部ジャワだが、10世紀ごろに中心は東部に移り、マジャパヒト(首都名が国名になる)も中心は東部ジャワにあった(帝国書院p.96も見よ)。16世紀末にマタラム王国が興ると、ジャワ島の政治中心は中部に戻った。一方西部ジャワは、マジャパヒト時代にもこれに服属しないパジャジャラン王国という独自の国家があったらしいが(だから、「マジャパヒトの領域」がインドネシア全域を覆っていたような教科書・参考書の地図は誤り)、重要になるのはオランダの拠点バタヴィアが置かれたりそのライバルとしてバンテン王国が栄えた大航海時代以降のこと。●ついでに、東南アジアの「インド化された」諸国では、個々の王が一方だけを信じたり、時期によって一方が強く他方が弱くなることもあるものの、基本的にヒンドゥー教と大乘仏教(ジャワでは特に密教)が並存し、そのどちらも民間信仰と混じり合っている。シンガサリやマジャパヒトの王は、死後にシヴァと仏陀と両方の姿で祀られる。マジャパヒト以前のジャワ文化を「ヒンドゥー=ジャワ文化」と呼ぶが、それは狭義のヒンドゥー教の意味でなく「インド的なジャワ文化」の意味。したがって、シュリーヴィジャヤとシャイレンドラの説明で大乘仏教とするのは代表的な記録や遺跡から許されるとしても(シャイレンドラは同時期にヒンドゥー寺院も造っている)、クディリ以後の諸王朝を「ヒンドゥー教」とするのはまったく不適當(ジャワ史全体では「仏教-ヒンドゥー-イスラーム」の3段階でなく「ヒンドゥー・仏教並存-イスラーム」の2段階)。

6. 唐末五代って何世紀だっけ?

例8:06年度早大(法)

下線gの唐末から五代にかけての東アジア世界の動向を述べた文中で、誤っているものはどれか。

- ①遼河上流域に起こった契丹では、耶律阿保機が遼を建国し、渤海国を滅ぼして東北地方東部を支配下に入れた。
- ②朝鮮半島では新羅にかわって王建が高麗を建国し、都を慶州とした。
- ③雲南では南詔から大理国へ政権が交代した。

④ヴェトナムでは李氏が大越国を建て、ハノイを都とした。 [正解は②のつもり：慶州が誤り]

例9：06年度学習院（経）

（文中の誤りを1箇所訂正する問題）... この紅河デルタの自然堤防地区に成立したのがハノイである。7世紀後半、隋王朝はこの地に安南都護府をおいた。その後、中国から独立を果たしたヴェトナムは、1009年、都をハノイに置いた。李朝時代のことである... [正解は「隋王朝」→「唐王朝」のつもり]

解説：大越の李朝は1009-1225年。唐末五代ではない。●李朝は最初からハノイを都にしたような誤解が見られるが、基本史料である『大越史記全書』によれば、李公蘊が帝位につき李朝を建てたのは1009年暮れだが、1010年に入ってから旧都ホアルー（華閩）を捨てて現在のハノイ（安南都護府の地）に遷都を決め、同年の旧暦7月に遷都した。遷都の際に竜が天に昇ったという吉祥にちなみ新都は昇竜（タンロン）と名付けられた（城壁そのものは大羅城と呼ぶ場合があり、それを書いた歴史地図もあるが、都の名前としては18世紀まで昇竜が正式）。2002年から中心部で、唐代以後歴代の宮殿址（阿倍仲麻呂もここで安南節度使として働いていたか？）の大規模な発掘がおこなわれている。

7. モンゴル帝国への服属とはどういうことか？

例10：06年度法大（経営〈経営戦略・市場経営〉）

（モンゴル帝国について）つぎの国々についてその国がこの大帝国の侵攻を阻止した国であれば1を、この大帝国に服属した国であれば2をマークせよ。

a. 高麗 b. 陳朝 c. パガン朝 d. マムルーク朝 [正解は2, 1, 2, 1のつもり]

- ・詳説世界史 p.98 では「フビライは... チベットや高麗を属国とした。さらに彼は南方に進出し、日本・ベトナム・チャンパー・ミャンマー・ジャワにも遠征軍を送った（同ページの「モンゴル帝国の最大領域」と題する地図では、日本や大越、チャンパー等に伸びる出兵を示す矢印に「フビライ＝ハンの遠征路」という説明がついている。フビライが自分で日本を攻めた？）。その遠征は強い抵抗にあつて、多くの場合目的を達成できなかったが、元の南方進出は東南アジアに多くの社会変動をもたらした。ミャンマーではパガン朝を滅亡させたほか、タイではモンゴル人の雲南侵入に押されて南下したタイ人がスコタイ朝、ついでアユタヤ朝をたてた...」、同 p.106 で「フラグはイラク・イランを領有してイル＝ハン国をひらき、エジプトのマムルーク朝と敵対したが...」とある。
- ・帝国書院 p.143 には「クビライは、1279年に南宋を征服すると、海軍を建設し、政府主導による海上貿易を開始した。ここに、モンゴル帝国は陸上だけでなく、海上も支配する巨大帝国へ発展した。クビライは、高麗・日本・東南アジアの各地にも兵を出した（元寇）。ミャンマーへは雲南から陸路で、ヴェトナムの大越国（陳朝）には陸海両路で、チャンパーとジャワには海路で遠征部隊を送った。これらは、ビルマ北部を除けばいずれも撤兵したが、もともと恒久支配や征服をねらっておらず、通商の拡大と交易路の確保が主目的であり、クビライの末年にはインド西海岸にまでいたる全地域が大元ウルスと友好・通商関係を樹立した」と毛色の違った記述がある。

解説：まず法大の問題からいうと、①陳朝は1257年、1284～85年、1287～88年のモンゴルの侵攻をいずれも撃退したが、最初の57年にはその後すぐ朝貢して安南国王に冊封を受ける。また80年代の戦争も、終戦後すぐから朝貢関係を復活させる（元が降伏した陳朝の王族とその子供を順番に安南国王に冊封したので、実際の陳朝の王様は冊封は受けられない）。このように**東南アジア諸国は、仮に中国と戦ってこれを撃退した場合でも、すぐに貿易や安全保障のために朝貢して、対中関係を復活させるのが普通**（清とビルマ・大越の関係も同様で、乾隆年間にどちらも戦争があつて朝貢・冊封関係が中断したが、清の敗北後すぐ復活した）。したがって、陳朝が「服属していない」とはいえない。②つぎにパガン朝は、すでに衰退していたところに元が襲来し、王朝が解体してしまうので、滅びたものを「服属した国」にするのはおかしい。この法大の問題は「撃退したところと敗北・占領されたところ」を問うべきだったか。●全体として、モンゴル帝国（元朝）というのは多様な勢力が連合した軍事商業帝国で、軍事活動の主目的は帝国書院が書くように、通商拡大と交易路確保、換言すれば現代アメリカと同じく「**経済活動の自由を力で他国に押しつけること**」だった。それは現代アメリカと同様にきびしい**実力本位で、結果に大きな格差のある社会だったが、全体がきわめて豊かで、しかも機会は万人に開かれていた**。そこで、軍事侵攻には抵抗した各国からも、モンゴル帝国に引き寄せられる人々があらわれた。東南アジア諸国がすぐ朝貢し、元寇の直後から日元貿易や禅僧の元への留学がブームになったのも、そのあらわれである（元は中国的な朝貢という形式にはこだわらない）。こうした状況を元朝の視点で表現したのが、「全地域が大元ウルスと友好・通商関係を樹立した」という帝国書院の記述。

* ついでに詳説世界史ほかでおなじみの「モンゴルの雲南侵入（大理国征服）に押されたタイ人が南下してスコタイ朝その他のタイ人王朝を建てた」という俗説については12で取り上げる。

* * 大越については山本達郎編『ベトナム中国関係史』（山川出版社、1975年）、パガン朝とタイ人諸王朝については山川各国史の『東南アジア大陸部』などが参考になる。

8. 中国人は漢字をどう使っているか？

例 11：06 年度東京学芸大

「(7世紀) シュリーヴィジャヤの中国名を記せ」[正解は「室利仏逝」のつもり]

- ・詳説世界史、東京書籍世界史B、帝国書院新編世界史Bともシュリーヴィジャヤの中国名を記さない。
- ・青木世界史は唐代の室利仏逝、宋代の三仏齊と定石通りに解説 (①-332)
- ・東書 (p.190 注2) は三仏齊につき「シュリーヴィジャヤのアラビア語訛りを漢字で音写したもの」と書きつつ、王家の継承関係はないとし、帝国 (p.95) は「三仏齊 (シュリーヴィジャヤの後身) と表記。

解説：①『新唐書南蛮伝』では「室利仏逝。尸利仏誓とも書く」。かの『南海寄帰内法伝』では尸利仏逝と書くところと室利仏誓と書くところがある。漢字は同音の字がたくさんあるから、どの字を使うかはなかなか統一できない。朝貢国の呼称などは公式には統一するのだが、それでもお役人のすることだから、担当者が変わると違う当て字で書かれてしまうようなケースがあつて絶たない。林邑も「臨邑」と書く史料が少なくない。だから、「邪馬台国」「扶南」「真臘」のように自稱がわからない国名以外は、わざわざ中国名を教えたり試験に出すべきではない。②三仏齊を、当時の海上貿易を牛耳っていたムスリム商人がシュリーヴィジャヤを「セルボザ」ないし「スリブザ」のように発音したのに当てた漢字だとする通説(セデスによる)には、深見純生氏による有力な反論がある(山川各国史・東南アジア島嶼部など)。それによれば三仏齊は、イスラーム史料がマラッカ海峡域を指す「ザーバジュ」(原語は「ジャーヴァカ」=小ジャワ)の当て字で、中国人はこれを単一国家と誤解したが、実態はマラッカ海峡域の港市群の総称である(その一つとしてシュリーヴィジャヤ=セルボザがあつたらしいが、港市群の盟主の座は、パレンバン、ジャンビなど有力港市が争っていた)。つまり室利仏逝(尸利仏誓)と三仏齊は、中国から見れば同じマラッカ海峡域を支配する港市国家連合なのだが、前者が中心の港市の名前であるのに対し、後者は港市群全体の名称と考えられる。

9. ポルトガルはモルッカ諸島を占領したか？

例 12：06 年度法大(現代福祉、経済)

(語群から選んで穴埋めする問題)... ポルトガルは、1511 年になるとマレー半島の先端に近く、香辛料交易の拠点であつた[5]に進出、1512 年には香辛料の生産地[6]を獲得してアジアにおける香辛料貿易の主導権を握り... [正解はモルッカ諸島のつもり]

例 13：06 年度関大(社)

(語群から選んで穴埋めする問題)... ディウ沖の開戦で(2) 朝を中心とするイスラーム勢力に勝利したポルトガルは、アラビア海の制海権を握り、インド総督のアルメイダやアルブケルケの活躍で、セイロン島の(3) やマレー半島の(4) を勢力下におき、クローブやナツメグなどの香料を求めて(5) 諸島に来航した... [正解はモルッカ諸島]

解説：法大の問題は誤解であろう。16 世紀以後、アジアでもヨーロッパの植民地が着々と広がったという古い史観の悪弊か？(青木世界史が 17 世紀までは商業重視、18 世紀から生産のための土地支配と分けることを強調しているのはさすが) オランダは「獲得」と言えるかもしれないが(それでも武装商館を拠点に貿易を独占したり、条約で土着の王国などを保護国化しただけで、完全に面として支配したわけではない→面としてインドネシア共和国に引き継がれる「オランダ領東インド」の完成は、1910 年代くアチェ王国を滅ぼした 1904 年とするものがあるのは単純な誤解であろう)、ポルトガルはクローブの産地テルナテなどに武装商館を置いて有利な取り引きをおこなっただけのこと(ヨーロッパ向けの香辛料輸出は一時ほぼ独占したが、これに劣らぬ規模のアジア向け輸出はまったく独占できない。ヨーロッパ向けもじきにムスリム=ネットワークが復活するし、最初はスペイン人、のちにオランダ人のようなライバルもいる)。生田滋『大航海時代のモルッカ諸島』(中公新書)など参照。

*なお、「モルッカ(インドネシア語ではマルク)諸島」は、歴史的にはクローブ(丁字)の産地テルナテ、ティドーレを中心とする島々(現在の北マルク諸島)だけを指す場合があるが、通常はナツメグ(ニクズク)を産するバンダ諸島(現在は中央マルク諸島の一部)など多くの島々を含めてこう呼ぶ。アンボイナ事件がおこった香辛料の集散地アンボン(現在は後者の近く)。

10. まぼろしの扶南国

例 14：06 年度早大(商)

(東南アジア大陸部について) この地ではじめて建てられたとされる王朝はどれか。

1. 林邑
 2. 占城
 3. 扶南
 4. 三仏齊
- [正解は3]

例 15：06 年度國學院大(文・法・経)

1 問 5 (扶南を建てた民族) この民族の名称を、次のア~コの中から 1 つ選び、マークしなさい。

- ア. モン人
 - イ. クメール人
 - ウ. ラオ人
 - エ. マレー人
 - オ. カレン人
 - カ. タイ人
 - キ. シャン人
 - ク. クシュ人
 - ケ. ツングース人
 - コ. モロ人
- [正解] イのつもり]

(「同系の民族が興した国」として真贋があげられているのがヒントになる)

- ・青木世界史 (①-324~325) では「A.D. 1 世紀末ごろにメコン川下流に登場した東南アジア最初の国家は」として扶南を答えさせ、「民族系統はよく分かりません。クメール系かインドネシア系か」と説明。

解説：①詳説世界史(p.60)は「東南アジア最古の王朝とされるのはメコン川下流に1世紀末に建国された扶南であり…」と述べるが、扶南の存在が中国に知られるのは三国の呉の時で、建国は当時の王より数代前だということで1世紀(専門家は1世紀「末」とは言っていないと思うが)と推測する根拠薄弱なもので、漢書・後漢書に見えるいくつかの国名より古いとか、それらは中国人が「国」と呼んだだけでまだ国家ではなかったという証拠はない。最近の考古学は、東南アジア各地で金属製武具の分布、大型環濠集落の形成や墓葬の分化などから、紀元前後に初期国家形成が進んでいたと考える傾向が強い(紀元後にインド人移民によってはじめて国家が形成されたというセデス時代の理解は誤り)。したがって東書や帝国は、扶南を「東南アジア最初の国家」などと書かない。[参考：山川各国史・東南アジア大陸部] ②東書や帝国、山川も扶南の民族系統を書かない(そもそも東南アジアや中央ユーラシアのような多民族世界では、「〇〇人の国家」といっても支配者の民族を示すか相対的多数派を指すかのどちらかでしかない)。扶南の場合、場所からクメール人と考えがちだが、はっきりした史料はなく、メコンデルタには近世までマレー系の住民も多かったので、青木世界史が正しい。

- * ちなみに「扶南国というのは中国人の誤解で、そんな国家は存在しなかった」という説がある。呉の使者に対して王様が「扶南大王」と名乗ったので中国側は扶南という国名だと思い込んだが、実は東南アジアには山や丘の頂に靈力が宿するという信仰があり、それを支配する王様がプノム(丘)の大王という称号を用いたにすぎず、国名ではない(途中で外部から新王が来たという記録もあるので、ひとつの王朝でもない)、要するに「7世紀まで続いた扶南」というのは、「扶南大王」という共通の称号を用いた一連の政権の総称に過ぎない、という考え方である。そのように万事がわからない中で確実なのは、1、2世紀ごろからメコンデルタを中心にした港市国家連合が成立し、それが中国人によって扶南と呼ばれた、ということ。魏志倭人伝はじめ古代日本に関する中国史料を分析する際にも、こうした各史料の文脈に注意した読み方が必要である。それには、日本関係資料だけでなく、中国史料中の外国の記述を幅広く読む必要がある。
- * * ついでに、詳説世界史にはご丁寧に「インドから来航したバラモンと土地の女性が結婚して国を作るという神話をもつ」というインド人研究者やセデスが好きだった説を載せるが、「インドのバラモン」は史料の誤読だという説も強く、また説明もなしにこんな話を載せれば、生徒はインド人研究者と同じように「インド人が扶南を立てたのだ」と思いかねない。近世にイスラーム化した東南アジア諸国ではいっせいに、王様の先祖は昔アラビアから来た(だから尊いのだ)、という神話を創る(近世の王様たち自身は、実際に中国やらアラビアやら、外国の血がたくさん混じっているが、遠い先祖のことなどわかりはしない)。それと同じ事だ、という説明ができるならよいが、そうでなければこの神話に言及すべきではない。

11. 東南アジア最初のイスラーム国家はどこだ??

例 16：詳説世界史の記述

「東南アジアの本格的なイスラーム化も13世紀ころからはじまっていった。」(p.98：モンゴル時代)

「東南アジアのイスラーム化は、8世紀ころからムスリム商人が東南アジアから中国へと交易圏を拡大するあいだに、諸島部を中心にすすんだ。はやくは、13世紀末にスマトラ島にイスラーム国家が成立したことが知られている。しかし、重要な契機となったのは、15世紀に国際貿易都市のマラッカの王がイスラームに改宗したことがあった。マラッカを拠点に、イスラームは交易ルートによってジャワからフィリピンにひろまり、ジャワでは16世紀末にイスラームのマタラム王国が成立した。」(pp.110-111：イスラームの拡大)

「13世紀以降、商人や神秘主義教団の活動によってインド・東南アジアのイスラーム化がすすみ、14世紀末にはマレー半島南部にマラッカ王国が成立した。この王国はマジャパヒト王国の商業活動をおさえこみ、インド洋と南シナ海を結ぶ中継貿易によって繁栄した。つづいて登場するジャワ島中南部のマタラム王国やスマトラ島北部のアチェ王国も、香辛料貿易によって栄えたイスラーム国家である…」(p.150：海域のイスラーム・ネットワーク)

- ・06年度明大(商)などに「東南アジア最初のイスラーム国家マラッカ」という記述がある。
- ・青木世界史(□-334)は、「東南アジア最初の本格的なイスラーム教の国」としてマラッカを説明。

解説：13世紀末のマルコ＝ポーロの記録に北スマトラの小王国が最近イスラーム化した、とあるだけで、13世紀に東南アジアのイスラーム化は本格化していない[これも、自分の専門のカンボジアが衰退した13世紀を、東南アジア全体のインド的文明の衰退の時期<13世紀の危機>にしたせいによるこじつけ]。インドのイスラーム化の本格化やスーフイズムの拡大が東南アジアのイスラーム化を後押ししたのは間違いないが、14世紀にマラッカ海峡を押さえたサムドラ＝バサイ王国(「スマトラ」の語源はこのサムドラ)の国力やイスラーム化の程度は十分わからず、イスラーム化が本格化するのはマラッカ王国(15世紀)以降とするのがよい。とりわけ東南アジアのイスラームが今日の範囲にまで拡大したのは、マラッカ滅亡後に王族が各地に逃れたり(マラッカの王家が逃れて建てたショホール王国など)、カトリックに対抗して布教が推進された大航海時代の動きの結果である[→帝国 p.159、169]。なおマラッカは最初からイスラーム王国だったような誤解もあるが、鄭和の寄港を利用して勃興した時期にはまだイスラーム化していない。明が消極化し、後ろ盾として役に立たなくなった15世紀半ばに王家が

イスラームに改宗した。

- * おまけ：05年度東経大の「マラッカに集まった交易商品の組み合わせとしてもっとも適切なものを選び」〔①綿織物、陶磁器、コメ、②食肉、銀、陶磁器、③香辛料、絹、宝石、④綿織物、宝石、小麦〕は、香辛料の入った③が正解のつもりらしいが、②④は駄目として、①も劣らず重要である（赤道直下の熱帯雨林帯ないし湿地帯に位置する東南アジア港市は、食糧を遠方から大陸部など遠方から輸入することも多かった）。教科書・参考書の交易ネットワークを示す地図は、ルートの表示に誤りが多いし、書き込まれている交易品も適当でない場合がままあるので危険。マラッカの様子はトメ・ピレス『東方諸国記』（岩波大航海時代叢書）に詳しい。

12.南詔・大理はだれのもの

例 17：05年度南山大学

（南詔・大理について）下線部3に関する記述として誤っているものを指摘しなさい。すべて正しい場合はオを選びなさい。

- ア 南詔はチベット＝ビルマ（ミャンマー）系の王朝であった。
- イ 南詔は唐から律令制度を取り入れたが、漢字は受け入れなかった。
- ウ 南詔はイラワディ川流域のピュー人の国を攻撃した。
- エ タイ人がたてた大理国はフビライによってほろぼされた。

（正解はイのつもり：漢字は取り入れるが律令は取り入れない）

- ・東京書籍（p.103）が「チベット＝ビルマ系の南詔」とするが、帝国書院（p.86）は「チベット＝ビルマ系の王家が支配する南詔」、青木世界史は民族系統にふれない。

解説：南詔は多数派の「白蛮」を少数の「烏蛮」が支配した国家と記録されているが、その烏蛮はチベット＝ビルマ系、白蛮はタイ系という、現代の語族・民族と直結させる理解は単純すぎる（林謙一郎「中国」と「東南アジア」のはざまで—雲南における初期国家形成『岩波講座東南アジア史第1巻』2001年）。これは奈良・平安時代の「蝦夷」をアイヌとみなすのが単純すぎる、というのと同じ問題。したがって選択肢アは王家のことを問題にしているだけと読むにせよ、あまり適当でない。同様に大理は白蛮の国とされるが、白蛮＝タイ系諸言語話者ぐらいなら可能性は高いが、特定の民族名で言うならそれは「タイ人」でなく、むしろ今日のペー族などの祖先と見なすのが今日の理解であるから、エはほとんど間違いである。飯島明子「北方タイ人諸王国」（山川各国史東南アジア大陸部p.136）によれば、南詔（の多数民族）・大理がタイ族国家だと言説は、19世紀末以来タイのナショナリストたちによってさかんに唱えられたが、今日では学問的にはまったく否定されている（青木世界史は①—327-328でこの説を丸ごと紹介したうえ、④—244では「大タイ主義」のためにこの説を吹聴したピピンにふれたところで、「タイ人のタイというのは自由の意味だ」というもっとも政治的な説を引いている）。そもそもモンゴルの大理征服は1253年だがスコータイの建国は遅くとも1240年代と見なされる（同朋舎『タイの事典』）。タイ系言語の話者がもともと南中国に住んでいたのは事実だがそれは雲南だけでなく広東・広西（チワン族はタイ系）・海南島にも広がっており、それらの地域から11世紀以前に、ゆるやかな南下が始まっている。タイのナショナリズム史観樹立と関係が深かったセデスだが、さすがに大理が滅びて逃げたモンゴル人がスコータイを建てたなどと馬鹿なことは言わず、元のパガン占領などを利用してタイ人が強大化したといった、13世紀末の状況をモンゴルの圧力で説明する点に主眼（ただしチャンパーやアンコールの衰退の原因として、元の出兵の影響を過大評価するような誤りも犯している）。真相はおおむね、ゆっくり勢力を拡大していたタイ系諸勢力が、元軍のビルマ・北タイへの進出、パガン朝の解体、アンコール帝国の衰退などの諸要因をうまく利用しながら、13～14世紀に独自の国家建設を進めた、というところ。また中部タイ平原のスコータイと前後して、北タイのランナー（チェンマイ）、ラオスのランサン（ルアンプラバン）、チャオプラヤー・デルタのアユタヤなどのタイ系諸政権が成立しており、「スコータイ→アユタヤ→バンコク」と単線的に覚えるのは、上の俗説と同様に19世紀末以降のタイで政治的に創作された「単線一國史観」を追認することになる（cf. 初期タイ人諸政権—アユタヤ—バンコクという帝国書院の書き方）。〔7の解説も参照〕。ちなみに大理王家の段氏は滅びておらず（高麗王家などと同様に）元に服属しただけ。元代の雲南は中央政府の出先である雲南行省、クビライの皇子フゲチが立てた雲南王家（モンゴルには○○汗国以外にも、領地・領民をもつ「□□王」がたくさんいた）、それに「段氏総管府」の三重政権状態で、段氏が滅びるのは明初のこと。

- ★以上のほかにも、回答に影響しないリード文の間違い、論理的でない出題文などが散見するし、問題自体は正しくても、中身を知りもしない「チュノム」（万葉仮名や国字のようなもので、漢字を知らなくても使えるという意味での「民族文字」ではないので、カナやハングルと同列には扱えない）、「強制栽培制度」（その時代性や世界経済の中での位置を教えずに「悪逆非道な搾取」のイメージだけ振りまくのは、植民地主義克服のためにかえってマイナス）などのワンパターン出題は好感が持てない。